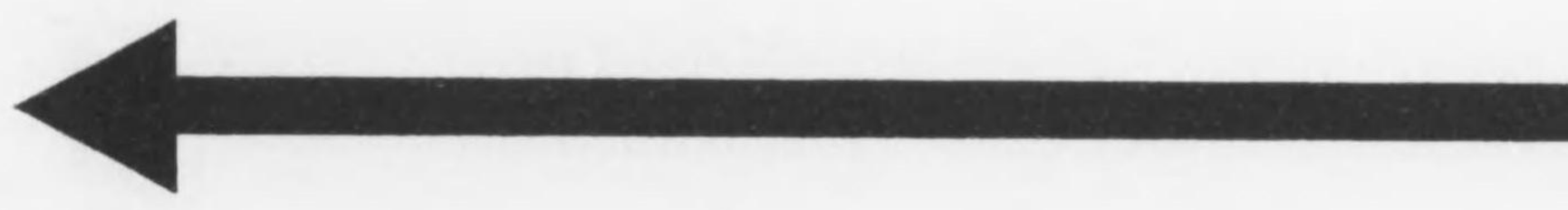


31-777
1200500582828



始



漫画坊つやん

1971
10月10日
10月10日





漫畫坊っちゃん



近藤浩一路



31

777



敬石先生



I 種

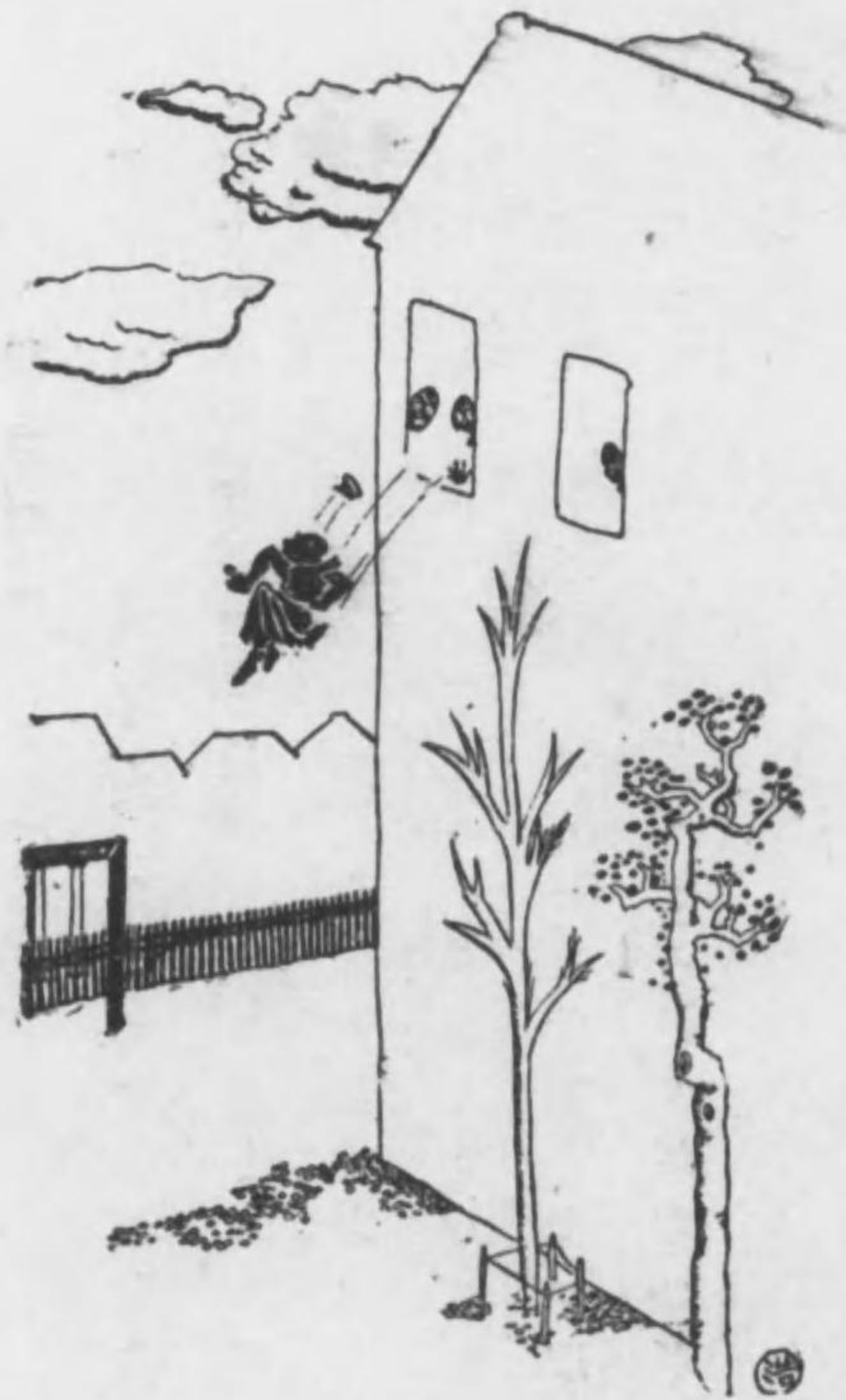
W



1200500582828

腕白時代(其二)

「坊ちゃん」は「腕白時代」から始まる。その腕白時代の第一の出来事は、学校の二階から飛び下りて、腰を抜かした事である。別に必要あつてども、過つてども無い。友達からいくら威張つても、そこからは飛び降りおりまいと云はれたのが癢で、何糞と飛び降りたのである。親父にうんと叱られたが此無鐵砲は親譲りだと、坊ちゃん自身は云つてゐる。





腕白時代 (其二)

相手は隣の質屋の子で、勘太郎と云ふ弱蟲だが力は強い奴、栗を偷みに來た所を取つ捕まへて捻ぢ合つてゐるうち、勘太の頭が坊ちやんの袷の袖へすべり込んだ。足^{あしがらみ}搦をかけて向うへ倒すと、勘太は、ちぎれた片袖をすつぽりと被つたまゝ、垣の外へころがり落ちてぐうと云つた。

腕白時代 (其三)

今度の相手は兄貴である。母の病中、臺所で宙返りをして、へつついの角で肋骨を撲つて死に損つた。大に母に叱られて、親類に逃げてゐると、留守の中に母が死んで了つた。悄悄と家に歸ると、兄は、「お前の爲めにおつかさんが早く死んだのだ。」と云ふ。癪にさはつたからその横面をぼかりとやつた。



婆やの清

おやちが勘當すると言つた時、おやち詫つて呉れたのは、婆やのお清である。十年來奉公して居る此の婆さんは、「坊ちやんは正直でよい御氣性だ。」と云つて、大變可愛がつて呉れた。或時清から貰つた三圓を、蝦蟇口と一緒に便所と落すと、清は拾ひ上げて井戸端で洗つて呉れた。よく洗つて火で乾かした一圓紙幣三枚、「これでいゝでせう。」と清は言つたが、かいて見ると臭かつた。



出立

物理學校を卒業すると坊ちゃんはすぐ四國の某中學へ數學の教師として赴任することになった。坊ちゃんは東京を離れて旅へ出るのは今度が始めてと云つていゝ位である。停車場まで見送つてくれた清が「もうこれがお別れになるかもしれませぬ。」と涙ぐんだのを見た時は、流石の坊ちゃんも急に心細くなつて泣きだしさうにしたがすぐ耐へた。





到着

汽船がとまると氣早の坊ちゃんはいの一番に舢はしけへ飛び乗った。陸へついた時も又いの一
番に飛び上った。磯にポカンと立つてゐた子
供に、中學は何處だと、怒鳴るやうに聞いた
ので子供は驚いて逃げて行つた。竿の上にと
まつてゐた鳥も驚いて逃げ出した。

失敬な宿

一先づ落ちつくつもりで山城屋といふ宿へ
乗りつけた。暗い暑い室へ案内されたので、
厭だと言ったが、生憎満員で御氣の毒様と言
はれて見れば、どうすることも出来ず、汗を
ふきく我慢することになった。所が、あと
で見ると涼しさうな室が澤山空いてるので、
急に奮慨しだした所へ、女中が膳を持って來
た。いやな室だが、飯はだいぶ旨かった。



五圓の茶代

實際坊ちゃんの貧弱な旅装を見た宿屋の方では、何だ書生ぼう、位にしか取扱はなかつた。坊ちゃんたるもの此際大に不平であらねばならぬ。こんなに虐待されるのも茶代をやらぬ所爲せみだらう、よし一番、八奮發して田舎者を驚かしてやらうと、力りきみ返つてゐる所へ、女中が夕飯の膳を持つて來た。そして給仕をし乍らいやに笑ひ出したので、最早耐たらず、イキナリ五圓札一枚を抛なり出し、「これを帳場へもつて行け。」と言つてやつた。





狸

坊ちゃんは元來人に譚名^{たんね}をつけるのが得意である。始めて校長に會^あつたばかりでもうちやんと、狸といふ尊稱を奉つた。薄帯の生えた、色の黒い、眼の莫迦に大きなところは成程狸に相違ない。その狸がいやに勿體ぶつて「まあ精出して勉強してくれ」と言ひながら恭しく辭命を渡した。坊ちゃんは、おやくいやな狸だぞと思ひながらそれを受取つた。

赤シャツ

教頭は文學士で妙に女のやうな聲を出す男。不思議なことには此暑い最中、平氣でフランネルの襯衣シャツなんかを着てゐる。しかもそれが赤シャツといふ念の入つたものだから驚かされる。尤も赤は衛生上特效があるといふ持論ださうだから敢て人を馬鹿にするつもりでやつてるものでないことはわかる。坊ちゃんはこの先生を赤シャツと命名した。





うらなり先生

英語の教師に古賀といふ大層顔色の悪い男がゐた。大抵顔の蒼い人は瘦せてるものと相場がきまつてゐるが此の人は蒼くふくれてゐるから不思議だ。坊ちゃんはこの先生を見ると、凡そうらなりの唐茄子ばかり食つた報いでこんなに蒼くふくれたんだらうと頗る單純に考へた。



山 嵐

堀田といふのは坊ちゃんと同様、数学の教師である。一見叡山の悪僧といふべき面構へであるから坊ちゃんから忽ち山嵐といふ尊號を授けられた。坊ちゃんが丁寧に辭令を見せたら、見向きもしないで、「やあ君が新任の人か、ちと遊びに来給へアハ、」と言つた。坊ちゃんは此のアハ、に少しむかついた。

野 だ

畫學の教師は一風變つて、べらくした羽織を着用に及び扇をパチつかせ、どう見ても藝人じみてゐた。坊ちゃんとの初對面に「え？東京？ そりやありがたい、御仲間が出来て……私もこれで江戸ツ子の片われてげす。」と言つた。坊ちゃん少々呆れたが、不取敢、野太鼓では呼びにくいから野だに縮少して等しく敬意を拂ふ事にした。





大の字

茶代の効驗は靦面、歸つて來た坊ちやんの顔を見るや否や、かみさんが帳場から飛び出して來てお歸り……と板の間に頭をすりつけた。そればかりか、お座敷が空きましたといつて十五疊の表座敷の方へ替へて呉れた。坊ちやんはこんな立派な座敷は生れて始めてだからといふので浴衣一枚になつて真中へ大の字に寝轉がつた。

最初の講義

始めて教壇に立つた坊ちゃん、何だか尻の邊がこそばゆくて、講義をやりながらも気がひけてならなかつた。生徒はみな珍らしさうな顔ばかりしてゐて一人も眞面目臭つた奴はなく、あたりは莫迦まかに騒々しい。時々圖拔けた聲で先生といふ奴がある。さすがの坊ちゃんも、先生には應こたへた。





おくれんかなもし

二時間目——今度の組は大きな生徒が揃つてゐる。しかしこんな田舎ッペーに弱身を見せると圖に乗るからと、先づ聲で威しつけて見た處、大分結果がよいから、それ見ると言はぬばかりに愈々調子に乗つて巻舌でべらんめ調を使用すると、前列の大きな奴が、いきなり立つて、「先生、あまり早うて分らんけん、もちよと、ゆるく遣つておくれんかなもし」ときた。



天ぶら四杯

大町といふ處に、特に東京を看板にした蕎麥屋がある。坊ちゃんは散歩に来て此の蕎麥屋を見ると耐へきれずに夢中で飛び込み、おい天麩羅を持つて来いと怒鳴つた。すると其聲に薄暗い隅の方にゐた三人程の連中が一齊に振り返つたかと思ふと御辭儀をした。見ると學校の生徒だつた。そんな事には構はず坊ちゃんは忽ち天麩羅四杯を平げた。



天 鉄 羅 先 生

其翌日、坊ちやんは何気なく教室へ出て見ると驚いた。黒板に麗々と天鉄羅先生と大書してある。生徒は坊ちやんの顔を見ると一齊にわあと云つて笑つた。坊ちやんはあまり馬鹿氣てゐるから天鉄羅を食つちや可笑しいかと言つた。すると生徒の茶目が、しかし四杯は多すぎるぞなもし、と言つた。

遊郭の團子

四日目の晩、住田といふ温泉町へ行つて遊郭の入口にある團子屋が評判だから温泉の歸りがけに一寸食つて見た。今度は誰も知るまいと思つて翌日すました顔をして學校へ出ると、第一の教室には團子二皿七錢と書いてあり、次ぎの教室には遊郭の團子旨いくと書いてあつた。





湯の中で泳ぐべからず

坊ちゃん人は人の居ないのを見すまして十五
疊の湯壺を泳ぎまはるのを無上の愉快と心得
てゐた。所がある日、今日も一番、大に泳い
でやらうと意気込みながら下りて来ると、大
きな札へ黒々と「湯の中で泳ぐべからず」と
書いて貼りつけてあつた。湯の中で泳ぐ者は
坊ちゃんより外にはない。



赤手拭

坊ちゃんはこの處へ來てから一番珍らしい住田の温泉へ毎日のやうに出掛けた。そしてその行く時には必ず西洋手拭をぶら下げて行くのだが、いつの間にか赤い縞が流れ出して一見赤手拭になつてゐた。これを見た生徒等は又一大発見でもしたやうに赤手拭くと騒ぎ出した。

いか銀

下宿は山嵐が周旋した。町はづれの岡の中腹にある至極落ちついた家だったが、骨董を商賣にしてゐる一名いか銀と呼ばれてる主人と來たら煩うるさくつて坊ちやんをいらくさせた。お茶を入れませうと言ふかと思ふと、人の茶を無斷で入れて自分一人で飲んでゐる、それ許りならまだしも、得體の知れぬ軸物などを持ち出して來て、とんでもない勸誘をやる。





バツタ事件 (其二)

いよく坊ちやんの宿直當番が廻つて來た。大に安眠を食つてやるつもりで、寢床へ這入り、仰向けになつて足をんと延ばすと何だか兩足に飛びついたものがある。驚いて足を振り廻すと、急に殖え出して脛や股の邊で暴れ出し、臍の處まで飛び上つて來たものもある。愈々驚いて起き上り様毛布を後へ抛ると蒲團の中からバツタのやうな曲者が五六十四、飛び出た。



バツタ事件 (其二)

坊ちやんは早速寄宿生の總代を呼び出し、
寝巻のまま腕まくりで談判を始めた。「何でバ
ツタをおれの寢床へ入れた。」バツタ何ぞな。
と生徒の一人はしらをきる。「バツタを知らぬ
か、知らなけりや見せてやる。」と言つたはよ
いが、肝心のバツタは小使が掃いて了つて生
憎手許にない。坊ちやんは愈々むかついて、
小使に「今のバツタを拾つて来い。」と叱り飛
ばすやうに言つた。するとヨボく探しに行
つた小使、其一匹を掌に載せて来て、「へえ……」



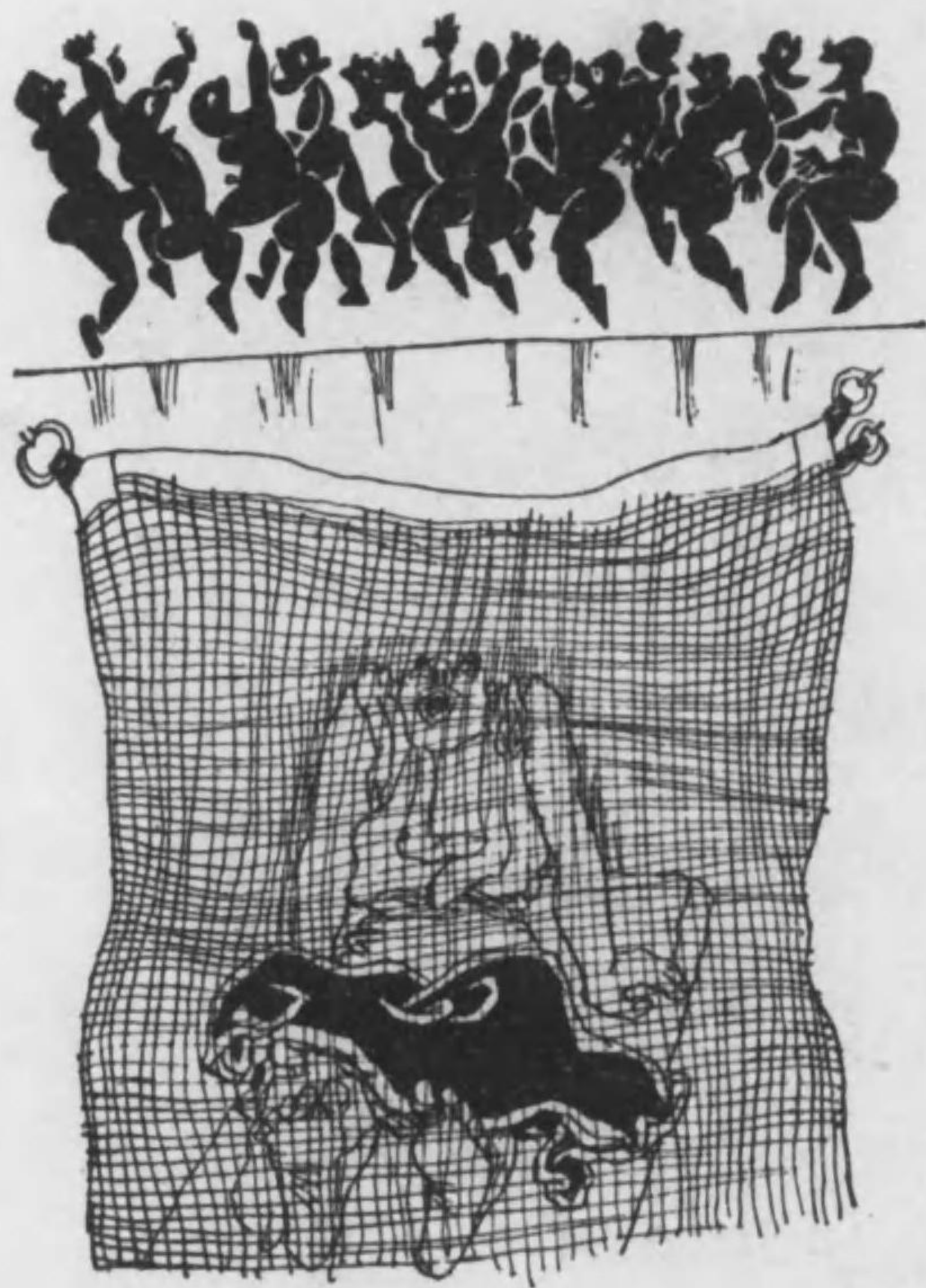
バツタ事件 (其三)

坊ちやんは小使の掌から摘み上げるや否やそれを生徒の前につきつけ、「さあこれがバツタといふもんだ、これがバツタだ。」といふと「そりやイナゴぞなもし」と遣り込められ、一寸まごついたが、「ナニツ、イナゴだつて？ イナゴもバツタも親類だ。……なもしと菜飯とは違ふぞ、さあ何だつてこんな悪戯いたづらをしたか。」



ハツタ事件 (其四)

一談判了つて寢床へ戻ると、さつきの騒ぎで、蚊帳の中は蚊で大變だ。一匹宛追拂ふのは七面倒だといふので釣手を外して滅茶々に振りまはし始めたところ、釣手が飛んで来ていやつていふほど手の甲をしてやられたが、今度は怒る譯には行かない。三度目に床に入った時はもう十時である。



バツタ事件 (其五)

睡らうとすると、突然、頭の上で三四十人が関の聲をあげながら、どん／＼足拍子を揃へた。まるで二階が落つこちさうな騒ぎだ。さつきの意趣返しに生徒が暴れ出したのである。逆も寝ては居られぬので、いよく／＼むかつ腹を立てムク／＼と起き上つた。



バツタ事件 (其六)

どうするか見る、とばかり宿直室を飛び出した坊ちゃん、梯子段を三股半に二階へ躍り上つてしまった。ところが不思議、バツタリ静まり返つてコトリともしない。して見ると今のは夢だったのかしらと廊下の中央で聞耳たてゝゐる處へ、月のさしける廊下の向うで一二三わあと囁し始めた。坊ちゃん怒るまい事か、轟然とそつちの方へ駆け出した。



もう面倒臭いから、引ずり出して詫まらせよう
と寢室の一つを開けようと試みたが、どうしても開かない。
すると又向うの室で足拍子が起る。實際手におへない。「野郎共、東西相應じておれを馬鹿にする氣だな。よしッ、おれにも覺悟がある。」
と言つて坊ちやんは廊下の真中にあぐらをかいて夜の明けるのを待った。

バツタ事件(其七)



バツタ事件 (其八)

夜が明けるが早い、生徒の一人を引張り出して来て、詰問を始めたが、何といつてもたど、しらがな、で手がつけられない。後から段々集まつて来た生徒等を見ると、何れも眠さうに臉をばらしてゐる。坊ちゃんは、「一晩位寝なかつたつてそんなケチな面をするな。」と言つたが、さういふ坊ちゃんも臉をばらしてゐた。



バツタ事件 (其九)

五十人餘りを相手に押問答最中、小使の注進で狸が駈けつけて来た。狸は「追つて處分する迄、學校へ出る。」と言つて寄宿生一同を放免した後、坊ちゃんの顔を覗くやうにして「顔が大分はれてゐますよ。」と言ひ、「嗚あなたも御勞れでせうから今日は御授業に及ばん。」と言つた。坊ちゃんは又其言草が癢に障つて顔をボリ／＼搔きながら、「いえ、口は慥かですから、授業には差支へません。」と答へた。



野だにつられる

ある日坊ちゃんも赤シャツと野だに誘はれた。濱から船頭を雇ひ、海上に乗り出したが、船中を見廻して、釣竿が一本もないのに不審を抱き、「釣竿がなくて釣が出来るのか。」と野だに聞いた。野だはしたり顔に、「沖釣には竿は用ひません、エヘ、糸だけでげす。」と吐かした。一本やられて坊ちゃん大に悔しがる。



ゴルギ

第一番に坊ちやんが一匹釣つた。すると野
だの奴、一番槍はお手柄だが、ゴルギちやと
けちをつける。側からは又赤シャツがゴルギ
といふと露西亞の文學者見た様な名だね、と
洒落れる。さういふ兩人も亦一生懸命になつ
て釣つたのはよいが、皆矢張りゴルギばかり
だ。坊ちやんはもう一匹で懲りてしまひ、仰
向けになつて大空を眺めてゐる。



内所話

釣に飽いたのか、野だと赤シャツはひそひそ話し出して、何だかくすくす笑ひ出したりした。「え？ どうだか……」「まさか……」「パッタを……」などといふのが途切れくすに坊ちゃんの耳に入る。坊ちゃんも氣にとめずに居たが、パッタと聞いて俄かに屹となった。それから尙兩人は、「天麩羅……」「ハ、ハ、ハ……」煽動して……「堀田が矢張り？……」「團子も……」などと時聞えよがしに話してゐる。坊ちゃんの目は愈々光った。

汗をかいた一錢五厘

釣の歸りに赤シャツは坊ちゃんにそれとなく今度のバツタ事件に關して山嵐が生徒を煽動したやうにほのめかした。正直な坊ちゃん怒るまいことか、いつぞや山嵐から氷水一杯奢つて貰つたことが、ひどく口惜しくなり、其代價金一錢五厘を手に握つたまま、學校へ駈けつけたがまだ山嵐が見えないので大に張合がぬけ、一寸机の上へ置き、汗のかいた錢をブー／＼吹いて見た。





赤シャツの歩き振

そこへ赤シャツがノックやって来て、坊ちゃんの恐ろしい権幕を見てとつたのか、女のやうな聲をして「君昨日釣の歸りに話した事は秘密にして呉れ給へ。」と切りに頼んだので、坊ちゃんも仕方なく、それだけは受け合つた。赤シャツは安心して自分の席へ戻つて行つたが、其氣取つた歩き方といつたらない。靴の底をそつと落して音を立てないのが自慢なのである。



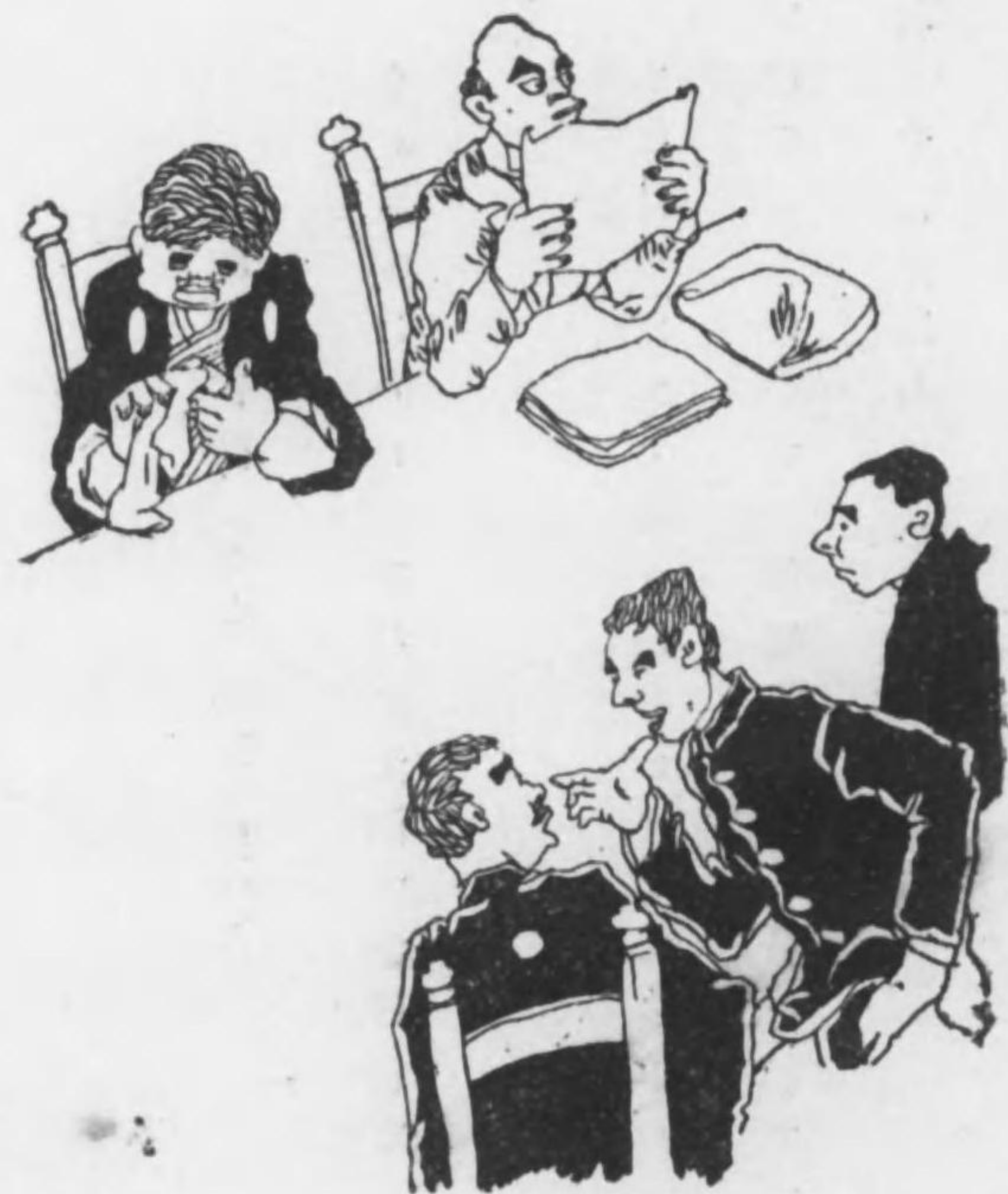
一錢五厘問題

やがて山嵐が来た。坊ちゃんはそれと見るなり、件の一錢五厘を出して、「是れは先達で通町で飲んだ米水の代だから取つて置け。」と山嵐の机の上へ置いた。山嵐笑ひながら、「詰らない冗談をするな。」とそれを坊ちゃんの机へ掃き返した。坊ちゃんは更に、「冗談どころか、おれは君に奢られる因縁がないから返すんだ、とらない法があるか。」とむきになる。山嵐は冷然と顔をしゃくつてフンと言つた。



教員會議（其二、席順）

いよいよバツタ事件の會議が開かれる。テーブルの一番端に狸が坐ると其隣りに赤シヤツが控へる。あとは席順も何も無い。坊ちゃんも博物館と漢學の間へ挟まつて坐つたが生憎野だと並んだ山嵐と向ひ合つた。山嵐が目をぐりつかせながら坊ちゃんを睨みつけると、坊ちゃんの方でも負けぬ氣で目玉をぐりくさせた。

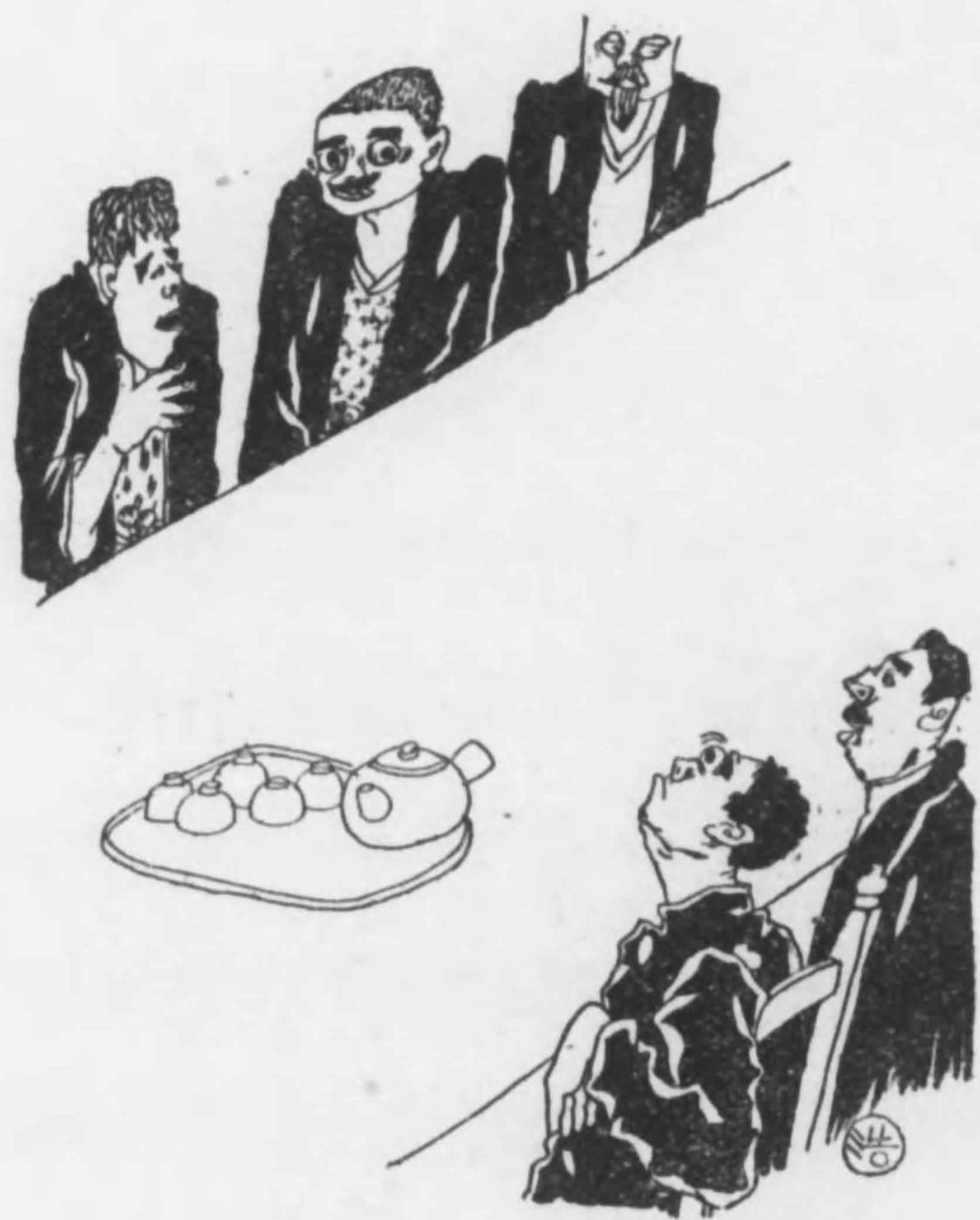


教員會議（其二、琥珀のパイプ）

大抵揃つたがひとりうらなり先生が見えない。

校長は風呂敷包から何かとり出して見てゐる。

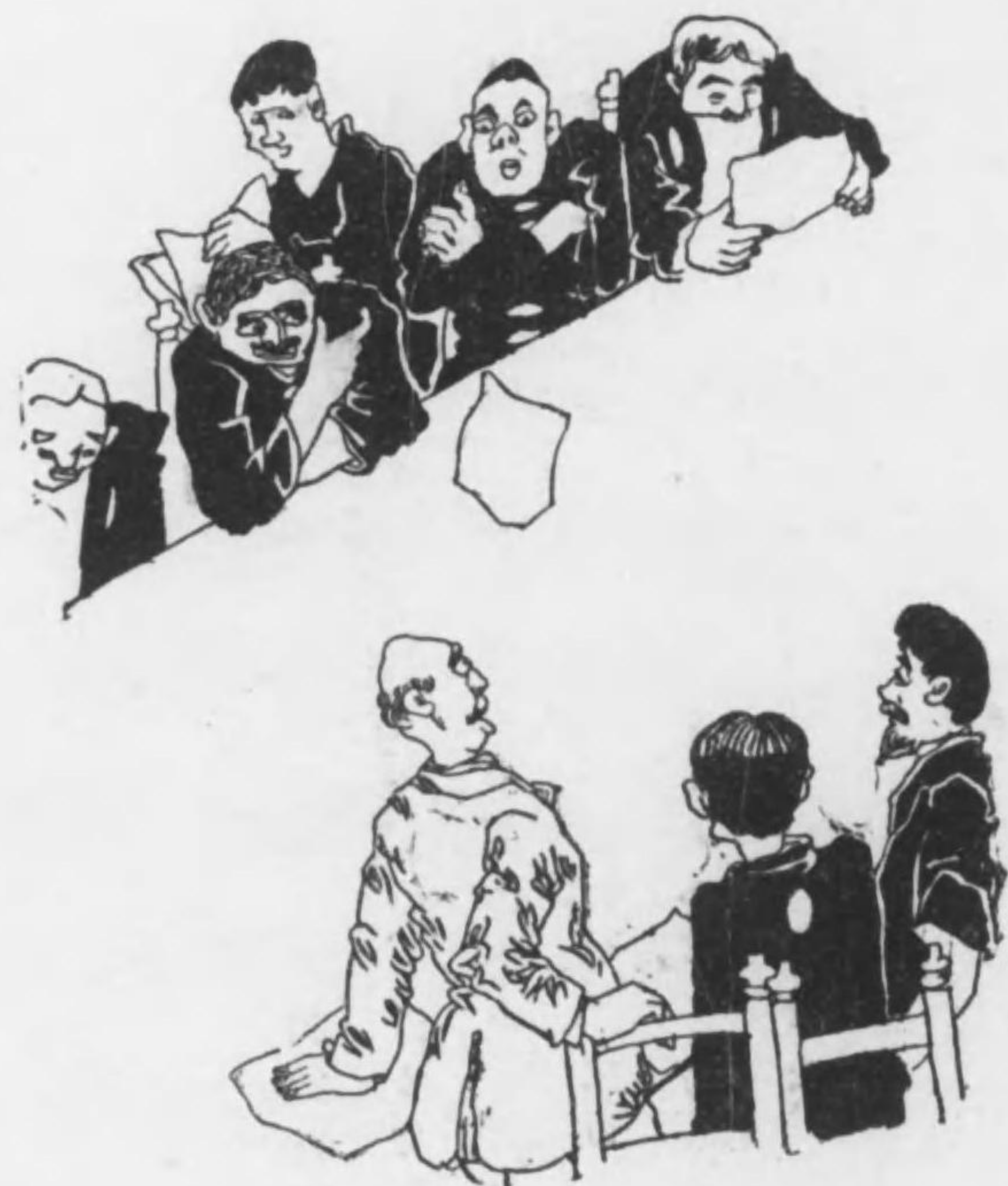
赤シャツは紺ハンケチで琥珀のパイプに磨きをかけはじめた。



他の教師はみな、手持無沙汰で退屈してゐる。

教員會議（其三、目玉の競争）

山嵐は野だから時々話しかけられるが、一向相手にしないで、相變らず怖い目をしては坊ちやんと睨めつこをやつてゐる。



教員會議（其四、狸は狸）

うらなり君が見えると同時に、蒟蒻版が配布される。狸は例の調子で、「生徒や職員に過失のあるのはみな自分の不徳の致すところである。」と述べた。成程狸だの校長だのといふものはえらい事を言ふもんだと坊ちゃんはずっかり感心してしまった。そしてそれほど自分一人て責任を引受ける位なら、生徒の處分なんか止めて自分から免職になれば世話はないのにと思つた。



教員會議 (其五、少年の活氣)

狸が狸なら赤シャツも亦赤シャツ相當な事をしやべつた。「何だ馬鹿々々しい、黙つて聞いてゐりや、少年血氣のものであるから活氣が溢れて云々だつて、活氣が溢れて、床の中へパッタを入れられて堪^{たま}るものか。」と坊ちやんは癪にさはつて身體をムヅ／＼させた。



役員會議（其六、野だの漢語）

三番目に野だの奴が生意氣に例のへらく
調でやり出した。

「實は今回のパツタ事件及吶喊事件なるものは吾々心ある職員をして。」なんかんといやに漢字ばかりを並べたはよいが、分つたのは最後の徹頭徹尾賛成しますの一句だけであつた。



教員會議（其七、徹頭徹尾反對）

坊ちゃんはもう耐へきれなくなつて、腹案も出来ないうちに盲目滅法に起ち上つた。起ち上るや否や、「徹頭徹尾反對です。」とやつたはよいがすぐ後がつかへてしまつてやけ糞に「……そ、そんな頓珍漢な處分は大嫌ひです。」とやつたので職員一同も思はずわつと笑ひ出した。すると坊ちゃん愈々逆せ上つて「一體生徒が悪いです。退校させても構ひません……何だ失敬な、新しく來た教師だと思つて……」



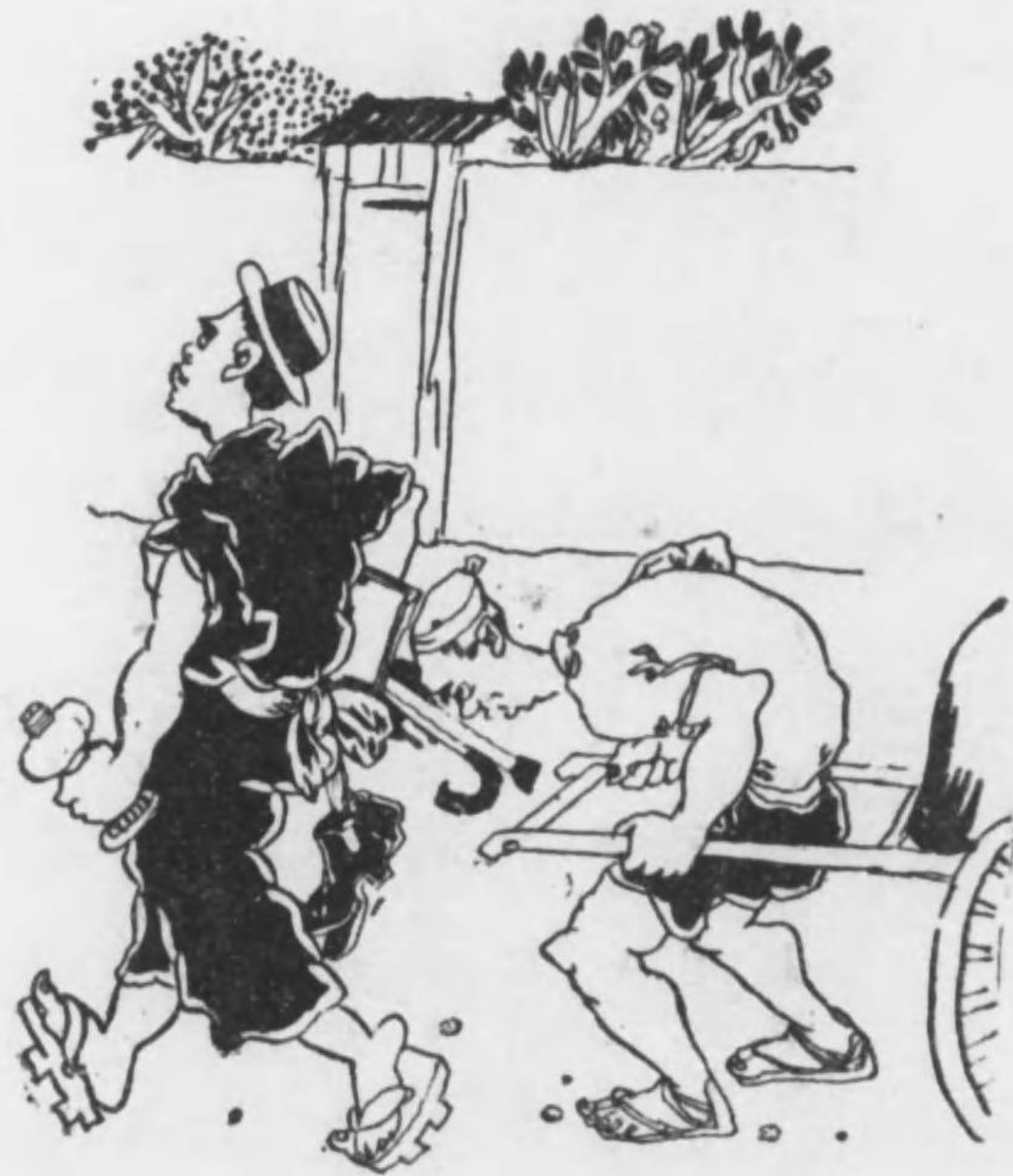
教員會議（其八、山嵐の一喝）

今度は今迄黙つてゐた山嵐が奮然として起ち上り「私は教頭及其他諸君の御説には全然反對であります。」と冒頭から一喝をやり、「何等原因もないのに新來の教師を愚弄する様な輕薄な生徒を寛假しては學校の威信に關はる云々。」と述べながら、どんと腰を卸した。一同はだまつてしまつた。赤シャツは又パイプを拭き始めた。



教員會議（其九、精神的娛樂）

會議の引き続きと號して狸が「風紀上第一着手として教師は成るべく飲食店杯に出入しない事にしたい。」と云ひ出すと又赤シャツが横合から物質的娛樂だの精神的娛樂だのと勝手な熱を吐き始めたので又腹を立てた坊ちやん「マドンナに逢ふのも精神的娛樂ですか。」とやった。すると赤シャツは苦しきさうに下を向いた。マドンナとは赤シャツの思召のある若い女のことだ。



引越 (其一、天意の宿)

何だか譯はわからないが、山嵐が出てくれ
と言つたので、坊ちゃん早速宿へ歸つて荷物
を引きまとめ、車に積んで外へ出た。しかし
これといつて行く宛は無^き論ない。たゞかうし
て歩いてるうちには見つかるだらう。さうし
たらそこが即ち、天意に叶つたわが宿と定め
ようと、ぐる／＼住みよきさうな町を歩いて
行つた。



引越 (其二、うらなり君の家)

歩いてゐるうちにうらなり君の町内へ来て
ゐた。ふと思ひついたやうにうらなり君の門
を遣入った。うらなり君のお袋が紙燭をつけ
て出て来る。主人を呼んで貰つて事情を話す
と、暫らく考へてゐたのち、丁度いゝ家があ
ると言つてわざ／＼先きにたつて案内して呉
れた。行つて見ると萩野といふ老夫婦が住ん
でゐる家であつた。



マドンナの正體

下宿の婆さんの話で、マドンナといふのは遠山といふ金持の御嬢さんで、うらなり君と婚約まで出来てゐたのを、赤シャツが来て横取りしようとかゝつてゐる事がわかつた。そして山嵐がうらなり君に同情して赤シャツの處へ掛合ひに行き、それから赤シャツと山嵐の仲が悪くなつた事までわかつた。

清の手紙

待ちに待った清の手紙が届いた。

坊ちゃんは縁鼻の先きに腰をかけ乍ら、それを見た。

手紙のなかには、坊ちゃんは痲癢が強すぎるから心配になる、とか、無闇に譚名なんかつける人と人に恨まれる、とか、いろくこまごまと書いてあつた。





芋攻め

坊ちやんが清から来た長い手紙を夕風に吹かせながら見てゐる處へ、婆さんが夕飯の膳を運んで来て呉れた。また今晚もお芋の御馳走だらうと思つて、お椀の蓋をあけて見ると矢張りお芋に相違なかつた。さすがの坊ちやんも毎日々々の芋攻めには閉口した。



遠慮ばい人

坊ちやんは又温泉へ行かうと思つて停車場まで来ると、生憎、二三分の事で乗り遅れてしまった。仕方がないから、ベンチに休んで待つてゐると、そこへひよつくり、うらなり君が見えた。坊ちやんマドンナの事を聞いて以来いよ／＼うらなり君が可哀相になつてるところだから、いつになく馬鹿丁寧に席を譲つたりしたので、うらなり君ひどく恐縮してしまひ、只もう尻ごみするばかり。



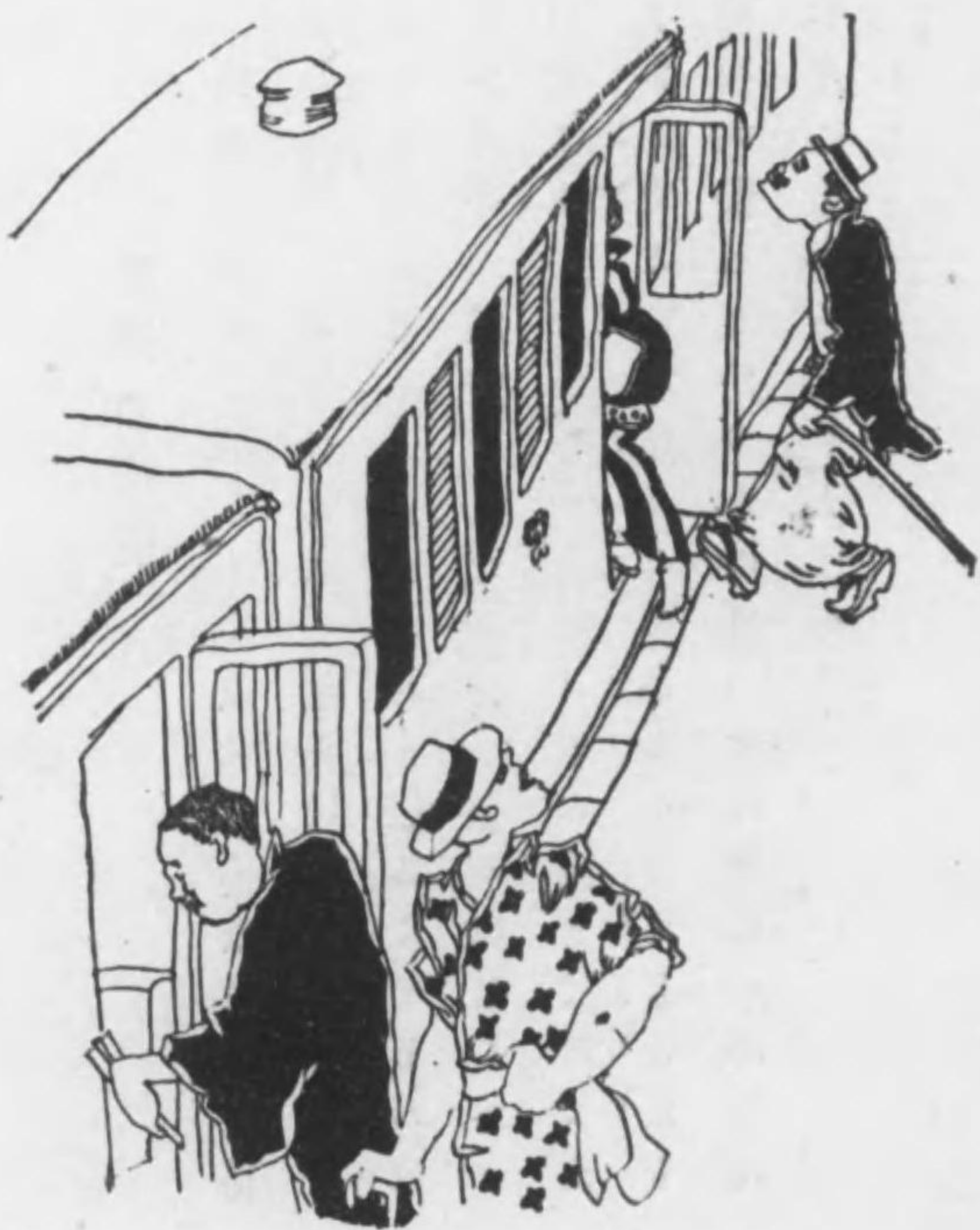
マドンナの出現

坊ちゃんとうらなり君と話し合つてるところへ、ハイカラ頭をした素敵な美人が、その母親らしい四十五六の奥さんと連れ立って這入つて来た。すると、うらなり君がのそく其女連の方へあるき出して行つたので、坊ちゃんはおやく／＼と言つて目を丸くした。この美人が、そも／＼例のマドンナである。



血 眼

ひとり残り残された坊ちゃん、ボカンとしてゐると、今度は赤シャツが服物の金鎖をぶらぐ、だらしない恰好をして、あたふたと駆け込んで来た。目は血走つてゐる。餘程夢中になつてゐると見え、坊ちゃんの立つてゐるのも気がつかず、駆け込んだなりきよるきよるしてゐたが、向うで話してゐるマドンナを見るや、すぐそつちの方へ行つてしまつた。



白切符と赤切符

汽車が着くと、マドンナもそのお袋も、又赤シャツも、上等へ乗り込んだ。こゝでは、いくら上等だつて自慢にはならない。住田まで僅か二銭の差で上下の區別がついてるきりだ。處がうらなり君は汽車まで遠慮して赤切符だ。下等室の入口で一寸躊躇してゐたが、坊ちゃんの顔を見ると思ひ切つて飛び込んでしまった。



湯壺の同情

温泉の湯壺で坊ちゃんはやうらなり君と落ち合った。坊ちゃんは一層あはれを催して、こんな時にも、先方の心を慰めてやるのは江戸ッ子の義務とまで心得、色々に話しかけて見たはよいが、うらなり君の方ではたゞえとかい、えと言ふぎり、しかもそのえもい、えも餘程大儀らしかつたので、仕舞ひには坊ちゃん自身の方から切り上げた。



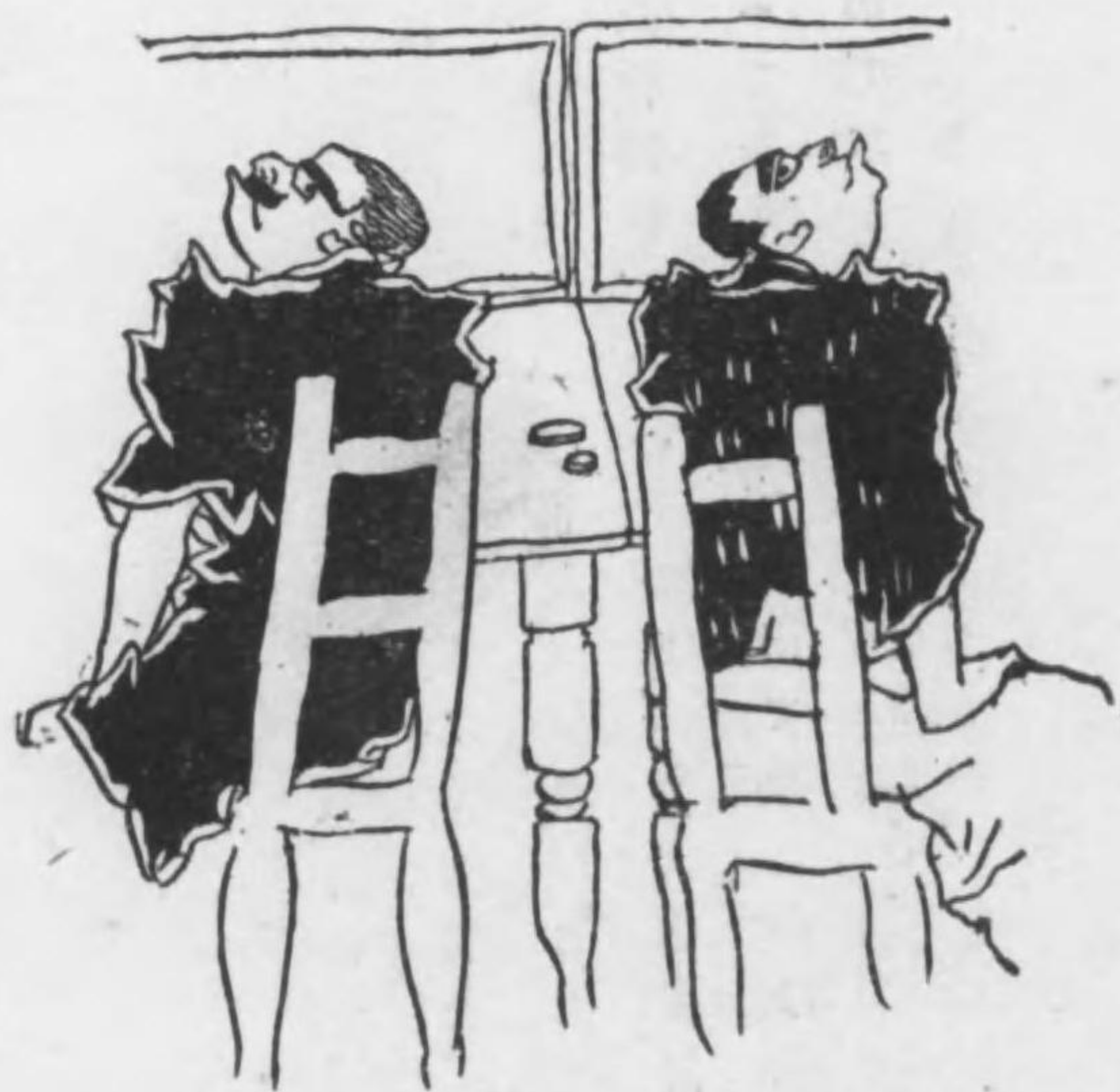
前代未聞の現象

坊ちやんは風呂を出ると、月がよかつたのでぶら／＼歩き出した。北へ登つて町の外れへ出ると、そこには左に大きな門があつて、門の突當りが御寺で、その左右が妓樓になつてゐる。山門のなかが、遊郭などと云ふのは全く前代未聞の現象だ。すぐ傍を見ると先達^{せんだつて}失策^{しじやく}つた團子屋があつたので、危険々々と言ひながら横道へそれた。



一大発見

いつの間にか野芹川の堤へ出た坊ちゃんは、先きの方に二人の影法師を見た。その一人は、慥に女だが、男の方はどうも見覚えのある恰好だ。坊ちゃんは一寸思ひ入れよろしくあつて、全速力で追ひつくなり、二人の間を擦り抜けざま、男の顔を覗き込んだ。すると男は、坊ちゃんの顔を見て、アツと小聲で言つたきり、女を促すが早いか、引返して行つた。それは正しく赤シャツである。



乗った一錢五厘

山嵐と坊ちゃんの机の間には依然として例の一錢五厘が乗つてゐる。もう埃だらけになつてゐる。坊ちゃんが手を出すか、山嵐がもつて歸るか、どつちも頑固屋の強情ツぱりだから、納まりがつかない。たゞ困ることには、大分疑ひが晴れて来て、もう話してもいゝと思ふが、此一錢五厘が邪魔になつて話し出す事も出来ず、坊ちゃんも今となつてはそれを見るのが苦になつてたまらない。



立派な玄關

其後、赤シャツから呼びに来たので、坊ちゃんは何用かと思つて、出かけて見た。玄關を見るとなかく立派なものだ、これで家賃九圓五十錢なら安いものだ、などと餘計な事を考へてゐるところへ、出て来たのは赤シャツの弟である。早速奥へ通される。



うらなり君轉任の事

赤シャツは、相變らず、琥珀のパイプをあやつりながら、坊ちやんの夢にも考へてゐなかつた増給の事や、色々の事を言葉巧みに話したが、うらなり君が、今度いよく日向の延岡へ轉任することに決つたと聞いたときには、いくら單純な坊ちやんでも、首をかしげずにはをられなかつた。



のめりの駒下駄

歸つて婆さんに聞くと、うらなり君の轉任は本人の希望でも何でもなく、無理やりに命令されたものらしいので、坊ちゃんも又黙つてゐられなくなり、すぐ引返して再び赤シャツの大きな玄關に立つた。すると足元に疊附きの、のめりの駒下駄がぬいである。奥から萬歳ですよと言ふ聲が聞える。又野だの奴が來てゐて、へらく太鼓をたゞいてるのだ。



増給を断る

やがて赤シャツが出て来た。真赤な顔をしてゐる。野だ公と一杯やつてゐたのである。坊ちやんに向つて「まあいゝぢやないか、あがり給へ、お客は外の人ぢやない、吉川君だ。」と言つたが、坊ちやんはそこにつつたつたまんま、「いえ、此處で澤山です、さつき僕の月給を上げてやるといはれたが、少々考へが變つたから、断りに來たんです。」



意氣投合

一錢五厘問題がもとで、口も利かず、只睨みあつてゐた山嵐と坊ちゃんの兩人、其後段とお互の疑も晴れて行き、山嵐が下宿立退の件について、大變失敬したと詫ると同時に坊ちゃんは忽ち、机の上に乗つてゐた一錢五厘を引込ましてしまひ、此處に始めて、二人の強情ツ張りはお互に意氣相投ずるやうになつた。

カ
瘤

送別會へ行きがけに山嵐は坊ちゃんの下宿に立寄つた。坊ちゃんが「今度の事件は赤シヤツがうらなり君を遠ざけて、マドンナを手に入れる策略に違ひない。」と云ふと、「うん、さうだ、あんな奴は鐵拳制裁に限る。」と言ひながら、山嵐は瘤だらけの腕をまくつて見せ、坊ちゃんがえらい腕だなと感心したら、その曲げた奴を伸ばしたり縮めたりして、更に輕石のやうな力瘤を皮のなかでグルリく廻轉して見せたりした。



送別會(其二)

兩人は一緒にうらなり君の送別會へ出た。狸の右にはうらなり君、左には赤シャツが控へてゐた。大抵、羽織袴で儀式ばつてる。洋服の坊ちゃんはずぐ胡座をかいたが、その隣りに坐つた體操の教師は洋服の癖にキチンとかしこまつた。流石體操の教師だけに氣を、つけの姿勢はうまいものだ。



送別會 (其二)

幹事が開會の辭を述べ終ると、狸も赤シヤツも送別の辭をやつた。殊に赤シヤツと來ては、自身で陥し入れておき乍ら、無闇に褒めそやし、此良友を失ふのは自分にとつても大なる不幸である、なんかんと済ましてる。これを聞いた山嵐は、すぐ坊ちやんの方を向いて、目玉をピカリ光らせた。すると坊ちやんは其返電としてべつかんこうをして見せた。



送別會 (其三)

赤シャツが引込むのを待ちかねて、やをら立った山嵐は、「只今校長始め教頭が古賀君の轉任を非常に残念がられたが、私は寧ろ一刻も早く當地を去られることを希望するものであります。」と冒頭から一喝を食はせた。坊ちやんは嬉しくなつて思はず手を叩いたのはよいが、一同の目が一齊にこつちを見たのでハツと思つた。



送別會(其四)

最後にうらなり先生が起つたかと思ふと、席を離れて末席まで出て来て、そこで實に鄭重極まる挨拶を述べ、自分がこんな馬鹿にされてゐる校長や教頭の前に忝しく御禮を言つて、へいつくばつて御辭儀をした。うらなり君はどこまでお人よしだか見當がつかない。

送別會 (其五)

酒が始まると、もう野だの奴は、逸早く狸の前へ出て、へいつくばつて御盃を頂いてゐる。一方主人役といふので一々懇勸に獻酬をやりながら、巡り出したうらなり君、やがて坊ちゃんの前へ来て、例の調子で一つ頂戴しませうと申込む。坊ちゃん恐縮して、急にかしこまつたはよいが、「これはくうらなり……」と口を迂らし、ハツと思つたがもう間に合はない。





送別會 (其六)

坊ちやんが席を外して便所へ行くと、後から山嵐がやつて来て、どうだ最前の演説は素敵だつたらうと、自慢する。すると坊ちやんの言草が振つてゐる。「大賛成だが、たゞハイカラ野郎と言つただけでは不足だ。おれなら、ハイカラ野郎の、ベテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、岡ツびきの、ワンク鳴けば犬も同然の奴とても言つてやる。

送別會（其七）

坊ちゃんが山嵐を相手に、イカサマ師云々の喧嘩調をくり返してゐる處へ、酔つぱらつた一人がヨロ／＼やつて来て、君逃げるなんてひどいよ……まだ背の口だ、さあ行つて大に飲み給へ、……ふん成程、——イカサマ師……面白い、……さあ行かう——と無理やり二人を引き立つて行く。





送別會（其八）

坊ちゃんは、酔っぱらひの爲に、壁に押し
けられて、ケロリとしてゐる。そこへ、お
座敷はこちら？と藝者がソロ／＼やつて來た。
すると、今迄柱に凭れてゐた赤シャツが急に
立つて座敷を出ようとして、その行違ひに、
おや今晚は、と藝者の一人が意味ありげに笑
つて挨拶した。坊ちゃんの目はピカツと光つ
た。



送別會 (其九)

一番若い美しい藝者を小鈴と言ふ。小鈴の側へは、又いつの間にか野だが来て背の明星ちらりと見たばかりでは御氣の毒様みたいでげす、とからかひ、たま／＼逢ひは逢ひながら……はどうでげすとたしなめてる。小鈴はつんとしてゐたが仕舞ひに、おきなはれ、と言つて野だの膝を平手でピシヤリやつた。野だはたゞエヒ、と笑つた丈である。



送別會 (其十)

向うの方では、そりや聞えませぬ傳兵衛さん、が始まる。見ると漢學のお爺さんが齒の抜けた口を歪ゆがめながら、やつてゐるのだ。所がすぐ途中でつかへてしまつて、それから？と藝者に聞いてゐる。爺さん大分老碌したと見える。



送別會 (其十二)

坊ちやんはうらなり君に、無理矢理、歸る事を勤めて、座敷を出ようとする、野だが出て来て、や御主人が先きに歸るなんてけしからん。日清談判だ。歸すことはならぬと、行手を塞いだ。坊ちやんは此態さまを見ると耐へきれず、日清談判なら、貴様はちやんく〜だらうと、拳骨をかためて、野だの腦天をボカリッ—。



赤シャツ退治の計略

下宿で坊ちゃん、山嵐は牛肉をつまきながら、赤シャツの奴、ふた言目には品性だの、精神的娛樂だのと吐かす癖に、藝者と関係をつけるなんていよくけしからん好物だ。吾等は宜しく天に代つて誅戮を加へる義務がある。就ては、彼奴が藝者と會見する温泉の町の角屋の前の柵屋の二階を借りて障子に穴をあけ、見張つてゐて、つきとめてやらう。といきまいた。





喧嘩(其一)

兩人は、赤シャツの弟に誘はれて祝勝會の餘興を見物に行き、その土佐踊の奇抜なものに見惚れてると、喧嘩だ〜といふ騒ぎ、そこへ赤シャツの弟が、群衆を潜りぬけて来て又中學と師範の喧嘩が始まつたので、早く来て下さい、と言ひながら、又人波の中へ消えて行つた。



喧嘩 (其二)

と聞いては、打棄つてもおけず、兩人は喧嘩の現場さして一散に駈けつけた。喧嘩は今が真最中である。暫らく躊躇してゐたが巡査が來ると事面倒になるからと思つた坊ちやんは山嵐に目くばせしながら、一番烈しさうな所へ躍り込み、よせよせと喧嘩はよせ、——と大聲叱呼して取鎖めようとしたが、かうなつてはもう手がつけられぬ。

喧嘩(其三)

荒波のやうに混亂した喧嘩の焦點に飛び込んでしまったのだから、出る事も引く事も出来なくなつた。たゞ無闇に藻掻いてゐる矢先、大きな師範生と小さな中學生とが捻ぢあつてのを見て、無理に引きわけようとする途端、坊ちゃんは誰かに足をすくはれて、バタリ倒れる。其刹那に又背中を堅い靴で踏みつけられた。山嵐も亦向うで、揉み返されてゐる。





喧嘩(其四)

ヒユウと飛んで来た石は忽ち、坊ちゃんの横面に命中した。やられたツと思ふ間もなく又後からは棒のやうなものでどやされる。師範生は尙、教師の癖に出てゐる、やつちまへやつちまへと騒ぎ立つ、坊ちゃんはもう、癪にさはつてたまらなくなり、田舎者の癖に生意気な事をぬかすなとばかり、傍に居た師範生の頭を張り飛ばした。



喧嘩(其五)

やがて巡査が十五六名駆けつける。皆素早く逃げてしまったので、捕まつたのは山嵐と坊ちやんの二人丈である。山嵐は紋付の一重羽織をずたくくにしたばかりか、鼻柱をひどくやられて鼻はふくれ上り、眞赤になつてゐる。坊ちやんは飛白の袴を泥まみれにしたが、山嵐から見ると損害は輕少だ、しかし矢張り顔をひつかゝれたりして、頬のあたりには血が流れてゐる。

勝手な新聞記事

其翌朝の新聞にはちやんと喧嘩の記事が出てゐた。しかも、近頃東京から赴任した生意氣なる某とか、善長なる生徒を使喚したとか、勝手な事が書いてあつた。坊ちゃんは床の中でこれを見て、目を丸くして驚いた。餘程癢に陣つたと見え、一度丸めて庭へ抛なげつけたが、それでも気が済まなかつたのか、便所の中へ叩きつけに行つた。





顔の傷

亂暴な新聞記事に昂奮しながら、ぶりく顔を洗ひに行くと、婆さんが、今朝の新聞をお見たかなもしと聞くので、くわつとなつて「欲しけりや、便所へ行つて拾つて來い。」とやる。顔がビリ／＼するので鏡をかりて見ると成程痛い筈、傷がついてゐる。



名譽の負傷

新聞に驚いて休んだなどと言はれちや癪だと云つて、坊ちゃんはいの一番に出校した。みな坊ちゃんのかはり果てた傷だらけの顔を見て笑はぬものはない。そのうちでも野だの奴は、妙な笑ひ方をしながら、いや昨日は御手柄で——名譽の御負傷で……なんて冷かす。



好一對

つゞいて山嵐も出校した。山嵐の鼻は昨日は真赤まかだったが今日は紫色にふくれ上つてゐる。このとんでもない顔をした兩人が、運悪く、戸口に正面した机に、隣り合はせたのも何かの因縁づくだらう。前を通る奴は皆くすくす笑つた。



狸と談判

いよ／＼時機が到来したから、例の計畫を
断行しようと山嵐と坊ちやんは結束した。そ
の恐ろしい意気込で坊ちやんは一先づ校長の
處へ談判に出かけ、「堀田に許り辭表を出せと
言つて私には出さなくてもいゝといふ法があ
りますか。」と詰つた。狸は驚いてたゞ「へえ？」
と言つてあつげにとられてゐた。



障子に穴

山嵐は辭表を出して學校と全く縁を切つた後、こつそり温泉の町の柵屋の表二階に隠れて障子へ唾で穴をあけ、大きな目玉を光らせながら覗きはじめた。赤シャツが藝者としけこむ現場を押へようと云ふのである。これを知つてゐるのは坊ちゃんより外にはない。



へこたれる

二人は毎日々々夜の九時頃から十一時頃まで一生懸命で覗いたが、赤シャツの影はてんで見えない。性急な坊ちやんは段々飽きて来て、六日目にはいやになつたと言つた。七日日には、もう休まうかと思つた。そこへ行くと山嵐は辛抱強い。眼を障子にピタリあてたまゝ、睨めきりて、今に目玉が飛び出して向うの丸い瓦斯燈を粉碎してしまふかもしれない。



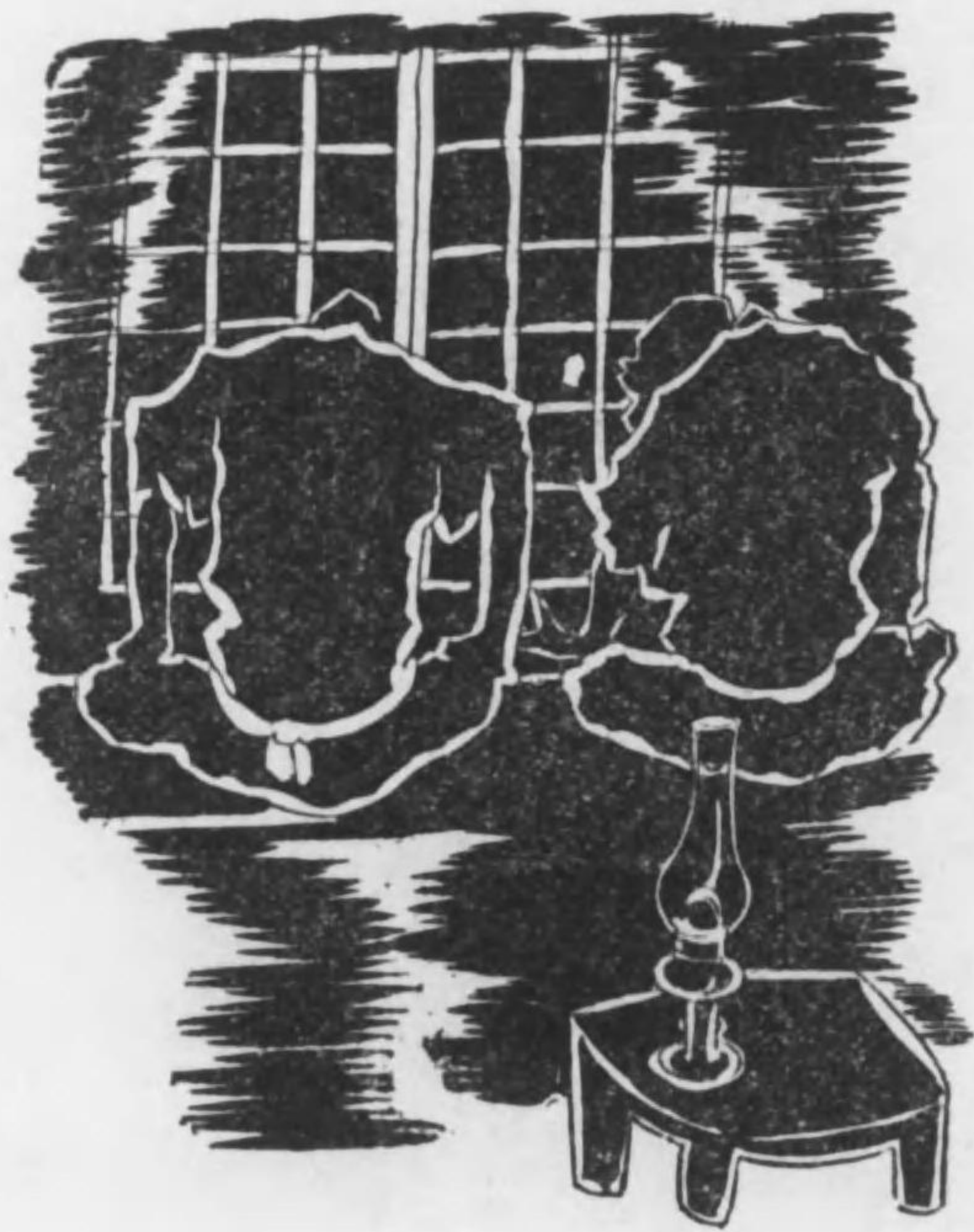
有望々々

八日目——坊ちやんが湯上りの暢氣な顔で
兩方の袂に鶏卵を四個宛入れて、懐手をし乍
らブラリやつて來ると、「おい〜有望々々。」
と覗きながら横目を使つた山嵐の目尻の邊に
は、いつになく活氣を呈してゐた。坊ちやん
はそれと聞いて何が有望だかわかりもしない
癖に、愉快々々と首をすくめ乍ら言つた。



坊主頭の影法師

山嵐は「最前あの小鈴が角屋へ這入った。しかし赤シャツと一緒にではない。別の藝者と二人連だ。彼奴狡いから藝者を先きによこしておいて、後から忍んで来るといふ寸法だらう、しめく。」と云った。時に九時十二分。
「おいランプを消せ、障子に坊主頭が二つ寫つちや可笑しいぜ。」
「さうだ、危険々々。」



勇み肌の坊ちゃん

山嵐と坊ちゃんの四つの目が頭の上の暗がり
りに光つてゐるとは知らず、いゝ機嫌でやつ
て来た野だと赤シャツの兩人、「もう大丈夫で
すね邪魔者を追拂つたから。」さうさ彼奴も頑
固一徹で策がないから可哀相なものさ。「あの
べらんめえと来ては勇み肌の坊ちゃんだから
愛嬌がありますよ。」増給がいやだなんて、あ
りやどうしても精神に異状がある。」などと話
し合つて行く。坊ちゃんの黒い影から湯気が
立つた。



そら出た

夜明の五時、赤シャツと野だの影が角屋を出た。見張つてゐた山嵐と坊ちゃんは、それとばかりに二人のあとを尾けて行つた。町の軒燈はまだボンヤリ點いてゐる。



尾行

町を外れると松並木が一町ほど續いてゐて
其兩方は田圃になつてゐる。なるべくなら、
此の並木でやつつけようといふ算段だから、
山嵐も坊ちゃんも彼等に氣どられぬやうに、
町の間は見えがくれに尾^ついて行つたが、出き
つてしまふと一散に駈け出した。



鐵拳制裁（其二）

丁度思ふやうに並木の中央で追ひつき、赤
シャツが足音に振り向く拍子を山嵐は待てッ
と言つて、その肩に手をかけた。野だの奴は
吃驚して逃げ出さうとしたが、其時には既に
坊ちゃんが其まへに立ち塞がつて、「逃げよう
たつてもう駄目だ。」と怒鳴つた。

鐵拳制裁 (其二)

坊ちゃんが野だを遮って、睨めつけてる間に、山嵐は、もう赤シャツを相手に、詰問をはじめた。

「苟も教頭の職にあるものが何用あつて角屋へ泊つた。」

「垂教頭が宿屋へ泊つて悪いといふ規則はありません。」





鐵拳制裁 (其三)

野だの言草が癢にさはって坊ちゃんは忽ち
袂の中でぶら／＼してゐる卵をとり出すや否
や、野だの面上に向つて投げつけた。投げつ
けられた卵は、野だの額の處でぐちゃりと割
れて、黄味が鼻の先まで流れ出した。



鐵拳制裁 (其四)

こちらは山嵐對赤シャツ。赤シャツが「藝者を連れて泊つたといふ證據が何處にありません。」と言つたので、山嵐の怒りは絶頂に達した。だまれ、といふが早いか、もう山嵐の鐵拳は、赤シャツの横面に到達してゐた。赤シャツは、よろよろツとした。



鐵拳制裁 (其五)

山嵐が赤シャツをボカ／＼食はすと、坊ちやんは又坊ちやんで野だをめちや／＼になりとばした。仕舞には赤シャツも野だも、松の根元にへたばつてしまつて、逃げようともしない。兩人が赤シャツに、「もう澤山か。」と言ふと、「もう澤山だ。」と言つた。野だにも「貴様も澤山か。」と言ふと、「無論澤山だ。」と言つた。



下宿にさよなら

下宿に引上げた坊ちゃんは、すぐ荷造りに
とりかゝつた。

それと見た婆さんは驚いて、どうお爲しるの
ぞなもし、とボカンとして後に立つた。

勘定を済ました坊ちゃんは、直に山嵐のゐ
る濱の港屋へ駆けつけた。



203

出帆間際



濱の港屋で汽船の出帆を待った山嵐と坊ちやんは、此間からの疲れが一時に出て来て、ぐつすり寝込んでしまひ、午後二時といふにけろり目をさました。女中に巡査は來なかつたかと尋ねたら、参りませんと言つたので兩人は顔見合はせて、「赤シャツも野だもたうとら泣寝入りに引込んだな。」と大きく笑つた、出帆は午後六時。

202



歸京

坊ちゃんは東京へつくなり、眞先きに、婆やの清がゐる家を訪れた。出迎へた清は、「おやまあ坊ちゃん、よくまあ早く歸つてくさいました。」とオロ／＼聲であつた。坊ちゃんも嬉しさのあまり「もう田舎へなんか決して行かぬ、東京で清と家をもつんだ。」と言つた。



大正七年十一月一日印刷
大正八年十月十四日發行

(定價六十五錢)

著者

近藤浩一路

發行者

東京市牛込區矢來町三番地
小田野 襄

發行所

東京市牛込區矢來町三番地
新潮社
電話番町 八八〇九九

印刷所

東京市神田區
宮本町五番地
印刷者

新潮社印刷部
高橋治一

振替(東京)一七四二番

近藤浩一路氏著 一 忽ち六版 —

漫畫 我輩は猫である

價六十五錢 郵送料六錢

近藤氏がその快筆を縦横に揮つた快書である。原作すでに滑稽味十二分、それを漫畫化したものであるから、いかに興味の多いかは、云ふまでもあるまい。世間の評判も、すばらしく、飛ぶが如き賣れ行きである。

■坊つちやん 夏目漱石作 價四十五錢 送料六錢

坊つちんの原文である、近藤氏の漫畫坊つちんと對照して讀まれたい。 — 第六十八版發賣 —



九
中

二
三

杉
山

終